



あるバイトの 聖地



川崎ゆきお

正社員とバイトが、ある日、会話する機会を得た。お互いにコミュニケーションをとろうということでの会話ではない。会話は偶然発生した。雑談だ。しかもプライベートな。

「今月までです」バイトを辞めるようだ。

「ああ、そうなんだ」社員は特別な反応はしない。あまり関係がないからだ。誰かがまた入ってきて、席を埋めるだろう。

「大変だね。バイトは」

「バイトは大変じゃないです」

「ああ、そうなんだ。そのつまり、フリーターですか。そのフリーターというの、大変じゃないかと」

「経済的には苦しいです。でも仕事は大変じゃないです」

「そうなんだ」

仕事が大変なのはこの社員だった。

「聞いていいかな」

「はい、どうぞ」

「うちの会社、気に入らなかったのかな」

「そんなことはありません。可もなく不可もなしです」

「あ、そう」

「一身上の事情です」

「じゃ、聞いちゃいけない事情なんだ」

「表向きのちゃんとした事情ですよ。一身上に持ち込んだわけじゃないです。旅行に行きます。旅費が貯まったので」

「旅行か、いいなあそれは、で、何処へ」

「東南アジアです」

「海外旅行か。僕なんか新婚旅行で韓国へ行ったきりだ」

「貧乏旅行ですよ。仏像を見に行きます」

「ぶ、仏像」

「アジアの仏ツアーです。これ、そんな企画ないですよ。僕が勝手に作って、勝手に行くだけですから」

「意外だなあ。考えもしたことがない」

「国内でもいいのです。四国の巡礼でもいいのですがね。それも一週間ほど巡ったこと、あります。でも、海外のほうが雰囲気がいいのです。がらりと変わりますから。見たことがない仏像や、遺跡です」

「ああ、僕も行きたくなかったけど、まあ定年退職後じゃないと無理かな」

「違いがあるほど、醍醐味も大きいのです。だから、海外に飛んだほうが効果的なんですよ」

「仏像の研究でもしているの」

「いえ、学校は理工系です。メインは旅行です。それだけじゃ、もったいないので、写真を写します。ただの観光写真ですよ」

「じゃ、趣味なんだ」

「はい」

「それで、バイトを辞めるんだ」

「はい、この会社、時間給よかったので、早く貯まりましたよ」

「自由なんだ」

「そのかわり、蓄えなんてないし、将来はないですよ」

「まあ、いつかどこかで落ち着くさ」

「はい、それはまあ、成り行きで」

「東南アジアの仏像って、そんなにいいのかな」

「日本の仏像とは、ちょっとお顔やスタイルが違うんです。これは、違うけど、近い。程良い距離なんです。でも、仏像を見るのが目的じゃなく、うろうろするのが目的なんです。まあ、それを普通旅行って言うんでしょうね。物見遊山です」

「戻ってきてから写真集とか出さないの」

「そんなの出しても売れませんよ。ちょい写しですから」

「そうなんだ」

「別世界にワープしたいだけなんです。その間、自分が自分でいられますからね」

「わかるような気がするが、僕には出来ないなあ」

「だから、仏像じゃなくてもいいです。ただのネタですから。旅行のための」

「帰ってきたら、また、別のバイトを見つけるのかい」

「そうです。またバイトで旅費を貯めます」

「いいねえ、青春だ」

「いえ、あなたより、年上のはずです」

「あ、そうだったのか。これは失礼」

了